

# 琉球大学学術リポジトリ

## 高機能自閉症児における社会性障害の改善に関する研究

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語:<br>出版者: 神園幸郎<br>公開日: 2009-03-06<br>キーワード (Ja): 高機能自閉症児, 社会性障害, 自己制御, ファンタジー, 自閉的ファンタジー, 共同注意, 愛着関係, 指さし<br>キーワード (En): high-functioning autism, social disorder, self-control, fantasy, autistic fantasy, joint attention, attachment, pointing<br>作成者: 神園, 幸郎, Kamizono, Sachiro<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/9087">http://hdl.handle.net/20.500.12000/9087</a>  |

# 高機能自閉症児における社会性の発達と描画の変化

大 城 理 恵      神 園 幸 郎

**Social Development and Changes of Drawing  
in High-Functioning Child with Autism**

Rie OSHIRO

Sachiro KAMIZONO

# 高機能自閉症児における社会性の発達と描画の変化

大城理恵

神園幸郎

## Social Development and Changes of Drawing in High-Functioning Child with Autism

Rie oshiro

Sachiro Kamizono

本研究は、高機能自閉症児における社会性の発達と描画の変化の関連性について明らかにすることを目的とした。社会性の発達については、自己認知・他者認知の発達を基盤として分析し、描画の発達変化については、描かれている対象及び内容、描画方法などから認知的背景を分析した。その結果、社会性の発達については、(1) "行為と情動の随伴的他者理解" (2歳6ヶ月から4歳3ヶ月)、(2) "意図的行為主体としての他者理解" (4歳4ヶ月から6歳8ヶ月) という二つの時期に区分された。一方、描画については出現頻度の高かった人物画、アニメのキャラクター、電柱を主な分析対象とした。その結果、描画の発達変化は、(1) "取り込みの描画" (2歳7ヶ月から4歳3ヶ月)、(2) "内面が投影された描画" (4歳4ヶ月から6歳8ヶ月) という質的に異なる二つの時期に分けられた。社会性の発達と描画は、ほぼ同じ時期に質的な転換が出現することから、対象児の描画、とりわけ人物画の発達変化は、社会性の発達をよく反映することが明らかになった。

### I はじめに

#### 1. 自閉症研究の流れ

自閉症研究は、1943年に米国の精神科医 Kanner によって11例の症例が報告されたことに始まる。Kannerはこの11名の示す病態を早期幼児自閉症 (early infantile autism) と名づけ、その特徴として、極端な対人的孤立、特異な言語の問題、同一性保持の脅迫的な欲求、物に対する巧みさなどをあげた。Kannerはこれを、母子関係の枠組みで捉えるなど心因性の障害であるとし指導法も完全受容的な遊戯療法が主流となった。1960年代に入ると、米国の Rutter は、先天的な器質障害によって生じる認知言語の障害を自閉症の一次的障害であるとみなし、対人関係の障害はそれによって引き起こされる二次的障害であるとした。この Rutter の見解により言語訓練等を中心とした行動療法や、脳の機能障害の原

因を突き止めるための生理学的研究が盛んになってきた。これを、コペルニクス的転換と呼びこれまでの自閉症概念が大きく覆された。

しかし、1980年代に入ると言語障害のみからは社会性の障害が生じないことが明らかになった。以前から、先天性の言語の遅滞を来す発達性言語障害の児童の中で、特に受容型と呼ばれる、言語理解の先天性障害があつて言葉が遅れるタイプの児童と自閉症児が類似した病態を示すことは指摘されていた。しかしながら、この両者において厳密な比較を行ってみると、社会性の障害という側面においては、両者は全く異なる病態であることが明らかにされた (Cantwell et al., 1998)。発達性言語障害児においては友人を作ることには大きな障害はなく、また非言語的なコミュニケーションにも問題がなかった。一方、自閉

症児の場合は社会的なコミュニケーションは制限されていた。このような所見が示すことは、自閉症の中心は社会性の障害であり、言語認知障害説による二次的な障害として社会性の問題が生じるのではなく、社会性障害を一次的障害とみなす考え方であった。このような流れは Kanner への回帰と称されている。1980年代に入ると、Baron-Cohenら(1985)や、Frithら(1989)が提唱した、『心の理論(theory of mind)』の観点から自閉症児の社会性障害に迫ろうとする研究が主流を占めるようになった。心の理論とは、他者の行動の背景に感情、意図、欲求、信念などの心の状態が存在することが分かるというものである。Baron-Cohenら(1985,1986)は、自閉症児は他者が「思う believe」、「期待する expect」、「望む want」などの心的活動を行うことを理解できない、つまり他者の心を理解することが苦手であることを発見した。

麻生(1996,1997)は発達心理学の見地から、自閉症児の「心の理論」障害説を検討し、自閉症児たちは、対象の認識を分かち合おうとすること自体を目的とする行為や、自己を他者と同型的な存在として組織化する模倣行動、象徴的な“ふり”行為が、本質的に苦手であることを指摘している。それらの「対象の共同化」や「自己と他者の同型性」の障害は、個と社会の原初的な関係性をはらむ身体において、関係性のなかで自己が組織化される過程が障害されることを意味するのであり、そこに自閉症児が越えることができない壁があると指摘している。つまり、「心の理論」が提示する「他者のこころを理解することの障害」という見解は、自閉症児が抱える社会的な関係性に根ざすことより早期の発達困難について、何も説明しえていないということである。

今日では、「心の理論」獲得の基盤ともなる、発達初期の模倣行動や共同注意、さらにこれらの社会的コミュニケーションを支える自己と他者の分化及び自己・他者認識の獲得過程を明らかにしていこうとする研究が主流となっている。

一方で、自閉症者自身の自伝や回想が数多く公表されるようになった。自閉症の特異な内的世界が語られるようになり、彼らと関わるものに大きな衝撃を与えることとなった。

そこで筆者は、自閉症者の“表現”に着目し、彼らの内的世界を探る手段の一つとして描画を取り上げた。

## 2. 一般的な描画研究

一般的な描画の研究は、年代別に見ると大きく3つの流れに分類できる。初期の頃の描画研究は、絵を心理的水準、つまり知能指数の面から検討しようとした。代表的な心理検査として、Goodenough(1926)が考案した人物画検査(Draw a Man; DAM)は、人物画を知的成熟度のものさしの一つとして捉えた。身体パーツの数、そのプロポーション、主要部に対するくっつけ方によって得点化していくという方法であった。また、Machover(1949)が考案した人物画検査は「人物画は環境の中の自己や身体の実態を表す」そして「人物画を構成する合成されたイメージは、その細部のすべてにわたって自己と結びついている」(Machover,1951)という仮定に基づき、パーソナリティを測定するための有効な方法と考えられた。第二の流れは、「投影的」観点から絵を見ようとするもので、精神分析的アプローチによるものであった。そして、1970年以降になると発達の観点から絵を分析する研究が表れた。東山らは年齢によって絵の表現が異なり、独特の表現と表現のなかに発達の道筋があることに着目した。そして子どもによって多少の違いはあるが、どの子どもも基本的に同じ道筋をたどるとして子どもの絵の発達段階をまとめている。また絵の発達を考えるうえで、子どもの絵の発達や発達段階には順序性があるが、あくまで一般論であって個々の子どもによっては少しずつ異なる。成長の早さには個人差があり、絵の表現の発達が異なり、指導の仕方や文化的環境によっても異なる。いいかえれば、子どもの諸能力の発達にしたがって、自

らが内在している発達のプログラムによって成長していく生得的・普遍的な要因と、子どもが生きていく生活環境・教育文化環境などによる要因と、両面から総合的に発達していく。したがって、あくまで一つの目安であって、個々の子どもによって多少の個人差があるので、固定化して考えないようにすることとしている。

### 3. 自閉症児に関する描画研究

自閉症児に関する描画研究を概観すると、描画発達や描画表現の特異性を示す研究が主流を占めている。浜谷ら(1989)は、二名の自閉症男児の事例を報告し、立体物図式においては技法使用の転回期が通常幼児に比べて特異に早い、人物図式の場合は特に早いとはいえず、また、二児ともに描画行動の初発期が4歳頃と遅い。さらになぐりがきはほとんど見られなかったと述べている。松瀬ら(2001)も同様に、自閉症児の人物画の出現は遅く、表現も自由画に比べると稚拙なものが多く、また、自閉症児の描画発達は健常児と同様の発達過程を辿ることを確認した。しかし、その発達過程は健常児に比して遅く、自閉症児に特徴的な表現や偏りが見られると述べている。

また、Tomasら(1996)は、自閉症児の描画特徴を四つにまとめている。第一に、彼らの図示技能は知的機能の一般的な(遅れた)水準よりも優れているだけでなく、同じ生活年齢の普通児が描いた絵と比べてもたいへん優れている。第二に、報告された自閉症児は一人も絵に色をつけることになんら興味を持っていなかった。第三に、普通児と比べて絵の題材の好みが異なり、特定の題材に対する強迫的な関心とでも呼ぶべきものをもっているようであり、それには人物像がめったに含まれない。第四には、早期から非常に詳細で見るもの中心の絵を描くことに熟達していたとしている。

Selfe,R(1977)は特殊な絵の才能を持つ少女Nadiaの事例を報告している。Nadiaは、幼い頃にいくつかの自閉症の徴候が顕著であったが、3

歳頃に描いた絵にすでに遠近法や陰影法が用いられているほどであった。明らかに重い認知及び情緒の障害を負っていたが、Nadiaはとりわけ馬を驚くほどの正確さと手先の器用さでもって描いており、一般的な描画発達に見られるなぐりがきなどの段階をすべて飛び越しているようだとSelfeは述べている。しかし、Nadiaは年長になり言語訓練を受けるようになると、言語能力の改善とともにこれまでの描画が稚拙なものになったという。また、木原(1990)もある自閉症男児の描画の変遷について興味深い報告をしている。その自閉症男児は、5歳のときにすでに遠近法を用いた絵を描くことが可能であったが、コミュニケーションが取れるようになった小学校2年生の頃には描画が稚拙になったという。一方、普久原は小学部の頃に担当したある自閉症女児の事例を報告している。この女児は、誰とも視線を合わさないが鏡の中の像を見ることだけには関心を示しており、鏡の中では鏡の中の自分や他者をもつれ込んで遊べるようになったという。その頃描いた人物画の顔は、数字や文字一字など記号化されたものであった。しかし、高等部になり対人関係にも広がりが見られるようになると描画にも変化が見られた。顔には目や口、鼻が描かれるようになり髪形にも変化がみられた。

以上のように、社会性の改善により描画が変化していくという事実が少なからず報告されている。しかし、それらの報告は両者の関連性を詳細に記述したものではない。そこで本研究では、社会性の発達と描画の変化の関連性を明らかにすることを目的とする。

## II 方法

### 1. 対象児

本児は知的障害を伴わないいわゆる高機能自閉症児である。両親と2歳年上の姉、5歳年下の弟の5人家族である。定額3ヶ月、始歩12ヶ月で運動発達上の問題はなかった。3ヶ月頃には、

あやすと笑い、壁の模様や人形、ミッキーマウスの絵本等を見て喜ぶ姿が見られた。10ヶ月頃には動きも活発になりおもちゃの取り合いもするようになるが、名前を呼んでも振り向かないことが目立ち始める頃であった。1歳半検診にて、診察や測定を嫌がり再度検査を受けるよう小児発達センターを紹介された。そして、1歳7ヶ月時に発達センターで自閉症傾向があると診断を受けた。2歳半頃には、絵本やビデオで覚えた単語を言うようになった。特に絵本が好きで終わりのページが近づくと泣き出して再度読んでほしいことを訴えるほどであった。3歳になると2語文や否定文を話すようになった。そして、3歳10ヶ月時に公立保育所に障害児保育該当児として入所した。登園については、日によって嫌がることもあったがお気に入りの看板を見たり、ドライブをしてから登園することで落ち着いて登園できるようになった。また、この時期は本児のこだわり行動の一つである電柱を描く行為が出現する時期でもあった。保育所での集団活動では参加することもあれば、参加せずに傍観したり一人遊びをして過ごすこともあった。本児が4歳8ヶ月時に実施された新版K式発達検査における発達指数は105であった。

## 2. 分析資料

本研究では、次の三つの資料を分析資料とした。第一の資料として、母親がK児の成長を記録した母手記であり、2歳6ヶ月(以下、2:06と略す)から6:08までほぼ毎日の様子が記録されている。ただし、4:10から5:00の間は母が出産のため記録なしとなっている。この母手記の内容は、家族やいとこたちとの関係や家庭での生活の様子、地域の行事への参加の様子等が記録されている。第二の資料は、保育所での様子を記録した保育士の記録であり、3:10から5:03までの記録である。この保育士記録は、母親との情報交換のために母が家庭での様子を記録したノートと同じノートに記録されているもので、登園日にはほぼ

毎日の様子が記録されている。内容は、保育士や他児との関係、集団活動や自由遊び場面での活動の様子、発表会や運動会等の行事での様子となっている。第三の資料として、K児が家庭や保育所で描いた描画である。家庭で描いた描画のなかで、その時期に頻繁に見られた描画や変化が見られた描画などを選択して母親が手記に添付していた。その描画は、計237枚でありそのうち出現頻度の高かった人物画70枚、アニメのキャラクター51枚、電柱33枚を主な分析資料とした。

## 3. 分析方法

本研究は、社会性の発達及び描画の変化の関連性を明らかにすることを目的としている。そこで、社会性の発達と描画の変化のそれぞれを分析し、両者を照らし合わせて比較検討をした。社会性の発達については、母手記及び保育士記録から主に自己認知・他者認知に関するエピソードを抽出し、その発達変化を記述した。描画については、心理検査等による診断的な解釈や精神分析的な解釈ではなく発達の視点に立ち、描画の対象及び内容、さらに描画方法から描画の認知的背景を分析した。

## III 結果と考察

### 1. 社会性の発達

#### 1) 自己認知

本児の自己認知の発達は質的に異なる4つの時期に分類された。

#### (1) 表象的自己認知の萌芽(2:06~2:08)

10ヶ月頃のK児は、名前を呼んでも振り向かないことが多く、母親もやりとりに困難を示していた。しかし、2歳6ヶ月になると、「保育所に入園して初めての朝の出席のお返事に『はい』と大きな声で手をあげる」(母手記:2:06)のように、呼名反応がみられるようになった。これは“K”という名前が自己を表象していることを理解できるようになったことを示している。しかし

この段階では、自己＝“K”という一義的な理解に留まっており、表象的自己認知の萌芽の時期であると考えられた。

## (2) 表象的自己認知の成立(2:09～3:10)

この時期になると、「自分のことを『ぼくちゃん』という」(母手記：2:09)のように、自分のことを名前以外の“ぼく”という人称代名詞で表現することが可能となっている。また、「絵本のストーリーが全部頭に入っていて自分のことと重ねる」(母手記：2:11)とある。このことは、自己の行為を表象しその行為を切り取って絵本の内容と重ね合わせることができるようになっているのである。さらに、2歳9ヶ月には所有意識を表わす“～の”という言葉が出現する。本児の所有意識の言葉は「母親の机の中から『かあさんの』と言って消しゴムを取る」(母手記：2:09)から始まり、3歳になると「二つ並んだジュースを見て『S(姉)の、Kの』という」(母手記：3:00)ように、自己のものとしての所有を表わすことよりも母のものという意識が先に表われた。加えて、自分と姉の所有意識が同時に出現したことも本児の特徴である。

## (3) 他者視点から対象化された自己(3:11～4:04)

この時期は、「ビニールの結びができるようになり褒めると、また開いては結ぶ」(保育士記録：3:11)ということが見られた。ひもを結ぶことが相手にとって好ましい行動であると理解し、その行為を繰り返す。これは、褒められている自己を褒めてくれる他者の視点から対象化して認知することができるようになったことを示唆する。また、「服を褒めるとニヤっとしその表情を鏡に映しては見つめる」(保育士記録：4:01)とあるように、褒められている自己を鏡に映して確認する行為も見られた。4歳3ヶ月には、保育所にて「他児がある場面の話しをするとその話題に入り『K怖かった』と話す」(保育士記録：4:03)ように、過去の自己を回想しその時の情動を他者へ伝え

ることも見られた。現在から過去の自己を対象化し、想起することが可能となっているのである。

## (4) 他者への志向的自己(4:05～6:08)

この時期は、自己の意図と他者の意図を対置させそのうえでやりとりができるようになっていく。「活動中、皆の輪のなかでぐるぐると回っているので『K座って』と何度も声をかけても動かない。担任が立ち上がるとさっさと椅子に戻っている」(保育士記録：4:05)のように、“座りたくない”という自己の意図を“聞いていないふり”をすることで保育士に示している。そうすることで、保育士の座らせようとする意図に対し、自分は座りたくないという意図の働きかけを行っているのである。しかし、保育士が立ち上がると叱られると思ったのか、さっさと椅子へ戻るのであった。5歳10ヶ月になると、「弟が残したゼリーをあげると、『赤ちゃんじゃない？』と確認し、『赤ちゃんじゃないよ』と答えると安心して口に運ぶ」(母手記：5:10)というように“自分は赤ちゃんではなくお兄さん”という意識が芽生え、他者との関係のなかで自己を捉え始めていた。

## 2) 他者認知

本児の他者認知の特徴として、母親、父親、姉、祖母、保育士、いとこのそれぞれの他者において認知の仕方が異なる点が見られる。もっとも早い段階で質的な変化が見られたのは母親であった。以下に、それぞれの他者における関係性の変遷から他者認知の発達を述べる。

### (1) 母親

2歳6ヶ月の時期は、母親との身体的接触を通じて自己の不安や不快な気持ちを軽減させていた。また、好きなキャラクターを描いてもらうことや絵本を渡して読んで欲しいことを訴える等具体的な行動を求めることが主であった。3歳1ヶ月になると、母親の言葉を自己の内面に取り込んだ自己制御の萌芽が見られた。例えば、「公文

の学習中に『ビー』とか『ちゃんと』と、いつもは母に言われる言葉を自分で言いながらやる(母手記: 3:01)というエピソードや、「高い所に登り『ここ危ない』と自分で言う」(母手記: 3:01)のように、母の言葉を再生することで自己の行動を制御していることが推察された。

4歳4ヶ月になると、質的な変化が見られた。「悪いことと分かっているながら行動を繰り返す。強い口調で注意すると『やくそく』と自分から指きりをして反省の言葉を言う」(母手記: 4:04)というように、怒っている母の表情からその背景にある母の情動の変化や何らかの意図を理解できるようになっていることが推察される。そのため、「指きり」というすでに獲得された行為でもって母親から叱られるという、Kにとって不快な状況をかわそうとしているのだと考えられた。

## (2) 父親

母親との関係と同様に、初期の頃は父に対しても具体的な行動を求めることが主であった。しかし父親に対しては、具体的な行動を求めるに留まり行為主体としては認識できているものの、意図を持った主体であるとの認知には至らなかった。それは、次のエピソードから推察された。「夕方、父親が気分不良で倒れ、寝込んでいると『何で父さん寝ているの?』と心配の様子。何度も聞き『お父さんお仕事のほうがよかった。』といつものお父さんに戻って欲しいことを言う。」(母手記: 6:01)というように、寝込んでいる父の内面に対する働きかけは見られなかった。しかし、母親に対しては4歳9ヶ月時に次のようなエピソードが見られた。「母が横になると側に来て背中をさすり『Kが優しくする。』と言う。」(母手記: 4:09)という具合に母の内面を気遣い接していた。

## (3) 姉

2歳6ヶ月頃の姉との関係は、絵を描くことを要求したり、人形を取り上げて追いかけてくるのを楽しんだり、具体的な行動を求める時期であ

った。これは、姉を行為主体として認知できていることを示す。2歳9ヶ月頃になると、姉の行動を模倣するようになった。姉が泣くと泣く、怒ると怒るという具合であった。姉のことを強く意識し、同型的に模倣することで姉との一体性を求めている。しかし、こうした一体性を強く意識するがゆえに、非日常的な場面になるとパニックを起こすこともあった。「姉のお遊戯会で姉を見つけると、『S~!』と泣きながら暴れ始める」(母手記: 2:09)や、さらに1年後のお遊戯会でも『Sおりる』と言って舞台からおろそうとする」(母手記: 3:09)というように、姉が自分の側を離れて舞台といういつもと違う場所にいることを理解できていない。5歳2ヶ月になると、「姉に『どれがいい?』とおもちゃを選ばせ、姉が選ぶと『やっぱり』と相手の心理を読んだ言葉を言う」(母手記: 5:02)というように、何らかの意図を有する主体として認知できるようになった。

## (4) 保育士

本児と保育士との関係は、特定の保育士を気に入ることで他の保育士へも関係性の広がりが見られるようになった。2歳7ヶ月頃から特定の保育士を気に入るようになり、その保育士に甘えて遊ぶという行動が見られた。また、「登園時、大好きな先生に走って抱きつく」(母手記: 3:00)という行動や、お昼寝のときも大好きな先生に甘えて何度も抱っこを要求するということがあった。特定の保育士に対して身体接触を求め、愛着を形成していることがわかる。そして、4歳5ヶ月になると、保育士を意図的行為主体として認知できるようになった。「活動中、皆の輪のなかをぐるぐると回っているの『K座って』と何度も言うが聞かない。担任が椅子から立ち上がると急いで戻っている」(保育士記録: 4:05)というように、椅子から立ち上がった保育士を見て、自分を注意するために立ち上がったことを感じ取って椅子へ戻ったのである。これは明らかに、保育士の意図に気付いた結果の行動であるといえる。一方で



大好きな保育士に対して距離を置くことも見られた。この保育士が現れると他の保育士の後ろに隠れたり「いや」と言葉で表現することもあった。その時期は、代わりとなる別の保育士を気に入ることもあった。しかし、長続きはせず再びお気に入りの保育士に積極的に接近し愛着が復活した。(保育士記録：4:09)

### (5) いとこ

家が近いこともあり、日常的にいとこの関わりが多かった。2歳11ヶ月頃から、いとこたちが集まると仲間に入りたがるようになり、他の子どもたちが何をしているのかを見るようになった。そして、時にはいとこたちのなかに入ることもあったが、自分の思いが通じないと腕を噛むなどの行為が見られるようになった。その後、一緒に遊ぶことはあっても本児は自分の世界に入り込み、お互いに関わることは減少していった。そのような時期を経て、3歳7ヶ月にはいとこの行為を模倣する場面が見られるようになった。また、本児にとって興味のないことでもいとこが興味を示すものなら自分にも興味があるように振る舞い、何でも皆と同じということを意識するようになった。いとこの共同性を志向し、それがいとこの行為を真似ることや同じ対象を好むというかたちで表出していた。5歳を過ぎる頃になると、いとこが遊んでいる様子を見て、いとこたちの行為を真似るだけでなく、自分の遊びたい内容を伝え、誘うこともできるようになった。この頃は、いとこたちと良好な関係が構築できていた。しかし、5歳8ヶ月頃になると“勝つ”ということにこだわりを示すようになりうまく遊べなくなってしまった。自分が一番にならなければ気が済まずに、負けると大泣きするようになった。勝ちを意識するがために、待つことができなったり、自分の思いが通じないと泣き出すことが多くなった。さらに、「祖母の家でいとこたちと遊ぶが途中で面白くなくなり勝手に帰ろうとする。止めると余計に意地になって『みんなと』

は遊びたくない。お姉ちゃんだけとがいい!』(母手記：6:02)ということや、姉はいとこと遊ぶが本児は母と遊ぶことを選ぶことが多くなった。時にはいとこたちと遊ぶこともあるが、トラブルが続き仲間外れにされてしまうことが多くなった。すると本児自らいとこたちと距離を置き、6歳7ヶ月頃には家にいることを好むようになってしまった。

また、本児はいとこを意図的行為主体としての認識には至っていないことが推察された。

### 3) 社会性の発達のみとめ

2歳6ヶ月頃の本児は、絵本のキャラクターの言葉や行為をそのまま取り込むことで言葉や行為が獲得されていた。表象的自己認知が可能になった2歳9ヶ月頃には、自己の身体への関心や自己主張が見られるようになった。この時期は、自己の要求を満たすために道具的に他者に関わることが主であり、行為水準での自他の分化が示唆された。3歳2ヶ月頃になると、自分の言葉を用いた独り言が出現するようになった。この時期の対人関係は、本児の快の情動と他者の行動との随伴性を核とするパタン化したものであった。そして、4歳を過ぎる頃には評価される経験の積み重ねから自己を対象化して認知できるようになり、さらに情動のコントロールも可能となった。苦手なことを我慢できるようになったり、不快な状態を内面化し自ら安定する手段を見出すことができるようになった。4歳4ヶ月になると他者を意図的行為主体として認知できるようになった。このように、自己の情動制御と他者の意図を理解できるようになると、他者と駆け引きをすることも見られた。一方で、5歳4ヶ月頃になった頃から勝負へのこだわりが出現し、他児を過剰に意識し始めた。5歳8ヶ月には他児との関わりを全て勝ち負けの枠組みで捉えるようになり、自分が一番にならなければ気が済まず、その結果、他児との間に様々なトラブルを生じるようになった。

## 2. 描画の変化

母手記に添付された描画のなかから、出現頻度の高かった人物画、アニメのキャラクター、電柱のについて発達変化を以下に述べる。

### 1) 人物画

人物画は、3歳3ヶ月に目と口の顔のパーツのみで初出した。頭足人に先立って目や口のみが出現した本児の独特の描き方に着目し、顔のパーツのみの出現を人物画の初出とした。その描き方は、果物の絵など元々形のあるものに目や口を書き入れる時期から、白紙に目や口だけをいくつも描くようになった。その目や口は一つ一つ形が異なり、表情がうまれていた。そして、3歳9ヶ月に一般的に頭足人と呼ばれる人物画が出現し(図1-1)、4歳1ヶ月になると胴体が出現した。(図1-2)

図1-2は公文の教材のプリントに描かれていたらくだの絵に男の子と女の子を描き入れているものである。らくだに乗って、不安そうな印象を受ける表情になっている。女の子の絵にまつげを書き入れるのは、姉の真似をしているのだろうと考えられた。



図1-1 頭足人 (3:09)



図1-2 胴体の出現 (4:01)

胴体のついた人物画が完成すると、4歳3ヶ月には自画像や家族の絵を描くようになった(図1-3)。そして、4歳4ヶ月には行為する人物を描くようになった(図1-4)。図1-4は跳び箱をする様子であるが、この頃は保育所で運動会の練習が行われていた。本児は、友達が跳び箱に覆いかぶさるように越えるのを見て、「〇〇みたいに」と友達の真似をして跳び箱をやっていたようである。その様子を再現した描画となっている。

4歳8ヶ月になると、人物を略画で描き匿名的な他者を表現するようになった(図1-5)。また、略画のなかにもまつげや髪の毛を書き入れることで男女の違いを表現している。さらに、5歳を過ぎる頃には、特定の他者を取り入れて描くようになった(図1-6)。ところが、6歳4ヶ月以降になると人物画を描かなくなってしまった。



図1-3 自画像 (4:03)



図1-4 跳び箱 (4:04)

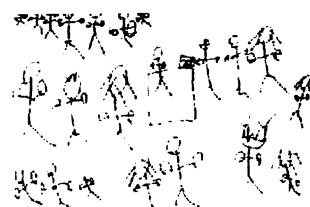


図1-5 略画 (4:08)



図 1-6 いとこたち (6:01)



図 2-2 アンパンマンとキティ (4:03)

## 2) キャラクター

キャラクターの初出は2歳7ヶ月で、人物画よりも早い時期であった(図 2-1)。初出した頃は顔だけに限定されており、4歳3ヶ月になってキャラクターの全身を描くようになった(図 2-2)。顔を描くことから胴体が出現し、全身像が完成する時期は人物画とほぼ一致した。4歳4ヶ月になると、これまでのキャラクターのみを描くこととは異なり、キャラクターとその場面を描くようになった。この時期は、人物画において行為する人物を描く時期と重なり、行為者の背景にあるモノや状況との関係で行為者あるいはキャラクターを認識しているのだと考えられた。4歳8ヶ月になると、手足を極端に拡大したり、体に模様を書き入れるなどしてデフォルメした描画が出現した(図 2-3)。

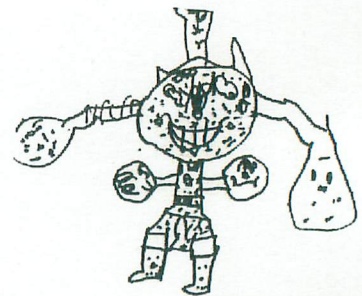


図 2-3 デフォルメされたアンパンマン (4:08)



図 2-1 バイキンマン (2:07)

## 3) 電柱

電柱の初出は3歳9ヶ月であった(図 3-1)。その最初の記録には「横断歩道、信号、モノレール、ロープウェイ、電柱に夢中でその写真や現物を見ると興奮する。筆を持つとすぐにそれらしきものを描く。」(母手記：3:09)とある。特に電柱を好むようになり、外に出るとよく見るようになったという。家に帰るとその電柱を描き、時には一度に20枚近く描くこともあった。それ以降、描く枚数は増減を繰り返しながら6歳8ヶ月まで出現した。



図 3-1 初出した頃の電柱 (3:09)



初出した3歳9ヶ月の描き方は、電柱のみを描いていた。そして、4歳2ヶ月になると、奥行きや遠近関係を思わせる描画が出現した(図3-2)。図3-2は、登所前に行くドライブコースの電柱である。坂道での電柱が再現され、坂の奥へ行くほど電柱が小さく描かれている。描画に遠近関係が出現するのは、一般的には8歳以降とされている。このような描画技法の発達のずれについて浜屋ら(1989)は、視覚的な形態をそのまま記憶し再生している傾向が見られるのではないかと述べている。本児も、「Kとお母さんが行ったところ」や「今〇〇(地名)」と言いながら描くことが度々見られ、行ったことのある場所や、通った場所をイメージしながら描いていることが推察された。

4歳2ヶ月には、電柱に加えてオートバイや車など実在するものが描かれるようになった(図3-3)。ところが、5歳11ヶ月になると、家や雲、木、かたつむり、ちょうちょなども書き込まれ自ら世界を作り出している印象を持つ絵になった。また、「Kピマーン村」と自ら命名し、電柱に加えて家や家の煙突からでるけむり、家の屋根から身を乗り出す人、木、バス等が描かれるようになり、ファンタジー的な要素が加味されるようになった。

さらに、年齢とともに道として描く基底線も複雑化し地図のように描かれた(図3-4)。

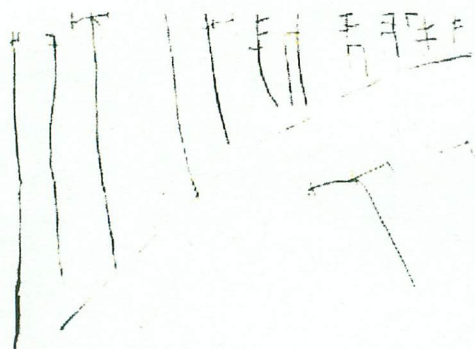


図3-2 ドライブコースの電柱 (4:02)

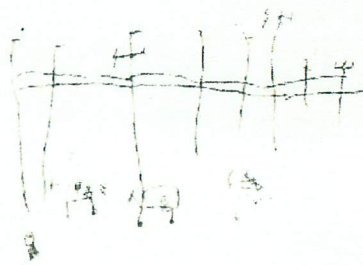


図3-3 オートバイや人が描かれる (4:02)



図3-4 地図のように変化した絵 (6:01)

#### 4) 描画の変化のまとめ

人物画は、3歳2ヶ月に輪郭がない目と口だけの描画として初出した。一般的に人物画の初出は、頭足人と呼ばれる目や口を囲むほぼ円形の一本の線に脚や腕らしきものが付け加えられた描画である。これはなぐりがきの時期に、一つの丸だけを描いて母親に見立てるなどの象徴期から次第に特徴的な目や口、脚や腕を書き込んでいくという過程で見られる。本児にもなぐりがきの時期はあったが、それが頭足人へと変化することはなかった。本児は、顔のパーツのみを描くことから始まり、あとでそれを囲む輪郭となる線が現れ、頭足人の出現となった(3歳10ヶ月)。4歳1ヶ月になると、胴体が登場するようになり全身像が完成した。4歳3ヶ月には、自画像や父母や姉など家族が描かれるようになった。4歳4ヶ月

で家族以外の他者が描かれるようになり、4歳8ヶ月にはそれまでの具体的な人物画が、イラスト的もしくは略図的な形態に変化した。5歳を過ぎる頃になると、明確な他者を描くようになり名前を書き入れて表現するようになった。しかし、6歳4ヶ月以降になると、人物画を描かなくなってしまった。

キャラクターについては、初発が2歳7ヶ月であり人物画よりも早く出現したが顔だけに限定されていた。胴体が出現し、全身像が完成する経緯はほぼ人物画と一致し、本児はキャラクターを人物と同種のものとして認識していたことが推察された。

初発した頃の電柱は、電柱のみをそのまま再現しており結果として遠近的に見える描画となった。4歳2ヶ月時には、オートバイや車など実在するものを書き入れるようになった。しかし、5歳11ヶ月になるとファンタジー的な要素が加味されるようになった。

#### IV 全体考察

社会性の発達においても、描画の変化においても4歳を境に質的な変化が見られた。4歳以前の本児は、絵本のキャラクターを静的なモデルとして捉え、それらの言葉や行為を取り込むことで自己と現実世界を結びつけることができた。つまりキャラクターの行為をコピーすることで自らの行為を獲得することができたのである。

その頃の描画は、人物画においては3歳2ヶ月時に輪郭のない目と口だけの描画が出現した。ちょうどこの時期には、母親の顔を見て「怒っている」と言ったり、自分の顔を鏡に映して「にっこにこ、こらっ」と表情を変えて遊ぶ行為が見られた。表情の変化を目と口の動きから読み取り、その限定されたパーツのみが人としての最初の認識であったと推察される。また、人物画に先立って2歳7ヶ月にキャラクターの描画が初出したが、顔のみに限定されていた。なかには、キャラ

クターの鼻に焦点化し鼻を中心に描いているような絵もあり、おそらくこの年齢相当の子どもには見られないような描き方もあった。このような描画が可能であるのも、見たものをそのまま写し取って表わすことができるためだと考えられる。この時期は、自己の行為においてもキャラクターの行為を写し取るということから自己の行為が獲得される時期であり、そのような“写し取る”という本児の認知的枠組みも描画表現からも見ることができた。

4歳を過ぎる頃に最初に変化が見られたのは、情動のコントロールができるようになった点である。苦手なことを我慢できるようになったり、気持ちの切り替えルートを自ら作り出すことで情動を制御できるようになった。さらに、4歳4ヶ月に他者を意図を有する主体であると認知できるようになると、ひよこが死ぬことに対して「かわいそう」と感じるようになった。これは、ひよこの内面性を自己の内面と重ね合わせることによる感じ取りであり、自己の内面を他者へと転写できるようになっていることを示唆する。また、その頃描かれた人物画は人が行為する場面であった。その人物の背景にある物や出来事とを意味づけて描くことができるようになった。さらに5歳を過ぎる頃になると、人物画に名前を入れるようになり明確な他者を描くようになった。この時期は、保育所の生活に慣れ、集団での設定遊びも一通りこなせるようになっており、さらに友達関係にも広がりが見られ他児とも一定の安定的な関係を構築できていた。

ところが、5歳4ヶ月に勝負への意識が芽生え始め、5歳8ヶ月には勝つことにこだわるようになった。自分が負けそうになったり、思い通りにいかないと泣いて訴えることや、遊びを途中でやめてしまうこともあった。そのようなことが続き、他児との間で様々な場面で摩擦を生じるようになった。すると、自ら他児とのトラブルを回避するように他児との関わりに距離を置くようになったのである。この時期は、これまでこだわり

の一つとして描いていた電柱の絵が頻繁に描かれるようになった。保育所から帰ってくると、電柱を描くことかお気に入りの物で自分を囲むなどして不快な状態を払拭しているようであった。5歳11ヶ月には、電柱の絵にファンタジー的な要素が加味されるようになり、また6歳4ヶ月以降は人物画を描かなくなってしまった。

以上のように、4歳以前は、行為においても描画においてもモデルとなるものをそのまま“写し取る”という手段を用いていた。他者とのやりとりにおいても、特定の他者との愛着関係は成立するものの、本児の一方的な関わりや、行為の要求が主な相互作用であった。しかし、4歳以降になり他者を意図的行為主体として認知できるようになると、他者関係の広がりとともに柔軟なやりとりを成立させることが可能となった。そのことが、描画にも如実に表現され、他者の名前を記入することや他者との楽しい出来事を再現するようになった。しかし、他者との関係に摩擦を生じるようになると自ら距離を置くようになり、描画においても人物画を描かなくなってしまった。

本児の描画、とりわけ人物画の発達変化は、社会性の発達を反映することが明らかとなった。

## V 謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただいた対象児K君とご両親に厚く御礼を申し上げます。K君の健やかな成長を祈りつつ、ここに記して感謝の意を表します。

## VI 参考文献

- 麻生 武 (1980) 子どもの他者理解—新しい視点から— 心理学評論 23 135-162  
板倉昭二 (1999) 自己の起源 金子書房  
遠藤利彦 (1997) 乳児期における自己と他者、そして心—関係性、自他の理解、および心の理論の関連性を探る— 心理学評論 40(1) 57-77

- 岡本依子 菅野幸恵 塚田一城みちる(2004) エピソードで学ぶ乳幼児の発達心理学 新曜社  
子安増生 (2000) 心の理論—心を読む心の科学 岩波書店  
グリーン・V.トーマス/アンジェル・M.J.シルク (1996) 中川作一監訳 子どもの描画心理学 法政大学出版局 135-152  
杉山登志郎 (2000) 発達障害の豊かな世界 株式会社日本評論社 16-41  
高野陽太郎編 (1995) 認知心理学 2 記憶 東京大学出版会 225-252  
寺山千代子 (1996) 自閉症児の描画能力の発達 国立特殊久教育総合研究紀要 第23巻 61-66  
寺山千代子・東條吉邦 (1998) 自閉症児・者の描画表現の特徴 国立特殊教育総合研究所研究紀要 第25巻 75-82  
浜田寿美男編著 (1992) 「私」というものなりたち ミネルヴァ書房  
浜谷直人 木原久美子 (1990) 自閉症児の特異な描画技法の発達過程 教育心理学研究 第38巻 第1号 83-88  
東山 明・東山直美 (1999) 子どもの絵は何を語るか—発達科学の視点から 日本放送出版協会  
フィリップ・ワロン著 加藤義信/井川真由美訳 (2002) 子どもの絵の心理学入門 白水社  
別府 哲 (1994) 話し言葉をもたない自閉性障害幼児における特定の相手の形成の発達 教育心理学研究 第42巻 第2号 156-166  
別府 哲 (1997) 自閉症児の愛着行動と他者の心の理解 心理学評論 40(1) 145-157  
別府 哲 (1999) 挑発行為を頻発した自閉症幼児における他者理解の障害と発達 発達心理学研究 第10巻 第2号 88-98  
松瀬留美子 若林慎一郎 (2001) 自閉症児の描画表現に関する発達の研究 小児の精神と神経 41(4) 271-279

モーリン・コックス著 子安増生訳 (1999) 子  
どもの絵と心の発達 有斐閣  
山上雅子 (1999) 自閉症児の初期発達 ミネ  
ルヴァ書房 3-23